

柳田邦男

MARIKO

マリコ

新潮文庫



マ リ

新潮文庫

や - 8 - 2



昭和五十八年十一月二十五日 発行
昭和六十三年九月十五日 九 刷

著 者 柳 やなぎ 田 だ 邦 くに 男 お

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株式 会社 新 潮 社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)二六六―五一二
 編集部(〇三)二六六―五四四〇
振替 東京 四―八〇八番
定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・株式会社金羊社 製本・憲専堂製本株式会社

© Kunio Yanagida 1980 Printed in Japan

新潮文庫

マ リ コ

柳田邦男 著



新潮社 版

3094

目

次

プロローグ	九
黄色いバラ	一六
上海	三三
銃声	四五
忍びよる影	六二
暗号	七六
開戦	九三
抑留	一二四
三万三千キロ	一四〇

ニニギミノミコト	一五
蓼科	一七
天皇の通訳	一九
別離	二六
訃報	三七
セレナーデ	四三
結婚	五九
『太陽にかける橋』	八三
敗北	一〇一

フロンティア……………	三二
新しい「かけ橋」……………	三四
カム・ホーム、アメリカ……………	三八
埧埧の中で……………	三四
終らない旅……………	三五
＊	
あとがき……………	四六
文庫版へのあとがき……………	四〇
主要参考・引用文献……………	四四

マ

リ

コ

深い感謝をこめてK・Yに捧^{ささ}げる

プ ロ ロ ー グ

ワシントンの秋は、美しい。

小パリとして設計されたこの都市の、放射線状に伸びる街路沿いの櫟けやきや銀杏いちようやプラタナスが、しつとりと色づいてきて、深みのある落着いた霧かすみ囲い氣きをかもしだす。

だが、この年——一九四一年（昭和十六年）秋のワシントンは、そうした街のたたずまいとは裏腹に、太平洋戦争の開戦前夜の緊迫した空気につつまれていた。

春から、駐米全権大使野村吉三郎と大統領フランクリン・ルーズベルトおよび國務長官コーデル・ハルの間で続けられていた日米交渉は、双方の国益が真正面からぶつかり合ったまま、共に譲らず、坐礁寸前の状態になっていたのだ。

日本は中国大陆での戦争の行き詰りを打開するため、仏領インドシナにまで軍を進めていた。アメリカはこれらの地域からの日本軍の撤退を強く要求していた。

すでにヨーロッパでは、ナチス・ドイツと連合国の間に戦争が開始されて二年経ち、ヨーロッパのほとんど全域で、苛酷な戦闘が展開されていた。

戦乱は太平洋にまで拡大するのか。日米両国は、戦争か平和かのぎりぎりの瀬戸際に立っていた。

東京の外務省とワシントンの日本大使館の間で、頻繁に電報や電話が交わされた。国運を決する外交交渉の連絡だから、交信はすべて暗号で行なわれた。

そのとき太平洋を行き交った暗号の中に、

《マリコ》

というキイ・ワードがあった。

このキイ・ワードは、日本の交渉方針や提案に対するアメリカ側の態度についての情報を連絡するときに、《米側態度》という用語に符合する暗号として、用いられたものだった。

「《マリコ》は病気だ」

と伝えれば、それは、

「《米側態度》は悪化している」

という意味だった。

なぜ、《マリコ》という女性の名前が、暗号に使われたのか。《マリコ》が、とくに《米側態度》に符合する暗号として採用されたのは、なぜなのか。

実は、《マリコ》は、実在の九歳の少女だったのだ。

寺崎マリ子——が、その少女の名だった。

父は寺崎英成ひでなりといい、ワシントンの日本大使館の一等書記官として、野村大使を補佐する立場にあった。母はテネシー州出身の生粋のアメリカ人で、グエンドレンといった。グエンドレンは、自ら短くグエンと呼んでいた。マリ子は、日米国際結婚をした外交官夫妻の一粒

種だったのである。

マリ子の名を暗号に用いることを思いついたのは、英成の兄で外務省アメリカ局長をしていた寺崎太郎だった。

寺崎兄弟は、アメリカとの戦争回避を願っていた親欧米派の外交官だった。とりわけアメリカ人を妻に持つ英成は、公的にも私的にも、日米協調を強く願っていた。太郎はそうした弟の思想を支持していた。

暗号名の《マリコ》は、太郎が二つの国の血が流れている愛くるしい姪めいの名に、戦争回避の願いをこめて用いたものだったのだ。その事実を、現在記憶している人はほとんどいなくなっている。

その頃、マリ子は自分の名が日本の命運を決めるほど重大な極秘電に使われているなどとは、まったく知らずに、ワシントンのアパートからアメリカ人のパブリック・スクール（公立小学校）に通っていた。

黒い大きな目に黒髪のマリ子は、長身の両親に似て背がすらりと高く、パブリック・スクールでの生活にすっかりとけこんでいた。

だが、その年の十二月七日（日本時間で八日）、日本軍のパール・ハーバー（真珠湾）奇襲攻撃によって、マリ子の生活は破局を迎えた。在米日本人は強制収容され、やがて交換船で日本に送り還された。青い目のグエンも、夫と行動を共にし、アメリカ軍による空襲が激化し、鬼畜米英の声がみなぎる日本で、苦難の生活を送らなければならなくなった。

そして、マリ子のその後はどうなったのか？

それから三十五年後の一九七六年（昭和五十一年）七月、酷暑のニューヨークで、新人ジェームス（ジミー）・カーターを民主党の大統領候補に選出するための民主党全国大会が、開かれていた。

この年の秋に予定されていた大統領選挙は、ニクソンのスキヤンダル、ウォーターゲート事件以後、すっかり人気を失ってしまった共和党から、民主党が政権を奪い返す絶好のチャンスだった。

民主党全国大会の会場にあてられた巨大な円形の建物マディソン・スクウェア・ガーデンは、全米から集まった代議員や報道陣など数千人で埋めつくされ、まるでもうカーターが大統領に当選したような熱気につつまれていた。

そして、五十の州の代議員席を示すポールや、カーター支持のプラカードなどが林立する会場の最前列中央、ちょうど演壇の真下に、アメリカでいちばん人口の少ない西部ワイオミング州の代表団席があり、その席の一角から、演壇に拍手を送ったり、自州の代議員の意見調整に忙しく動きまわったりしているすらりとした女性の姿があった。

日によって、白地に赤と紺の縁取りラインを入れたトリコロールのスーツで盛装したり、渋いブルーのツーピースを着たり、毎日衣装にせいっぱいの意を用いている彼女は、最前列のワイオミング州代表団の中で、際立って目立っていた。

彼女の名は、マリコ・ミラーといった。

彼女こそ、かつての寺崎マリ子だった。彼女は、戦後母とともにアメリカに渡って、民主党リベラル派（進歩派）の弁護士メイン・ミラーと結婚し、アメリカ国籍を得て、マリコ・テラサキ・ミラーとなった。そして、自らも政治運動に入って、いま、ワイオミング州民主党副委員長の地位を占めるまでになっていたのだった。

黒い髪にはふつくらとしたウェーブがかけられ、鼻筋の通った顔立ちは、長身のスタイルとともに、知的な美しさをただよわせていた。

ベトナム反戦や女性解放に、積極的な発言をしてきたマリコの政治思想が、鮮かに表明されたのは、副大統領候補選出の日だった。

カーターは、副大統領候補としてリベラル派の上院議員モンデールと組むことを表明していたが、党大会では、徴兵忌避運動の青年フリッツ・エフューも、少数派から副大統領候補に立候補していた。

エフューの支持演説のために壇上に上ったのは、車椅子のベトナム帰還兵で、破壊された青春の記録『七月四日に生まれて』（邦訳『七月の寒い朝』）の著者であるロン・コビックだった。「十二年前、私が十八歳のとき、私は海兵隊に入隊しました。国のために仕え、よきアメリカ人になりたかったのです。私はアメリカの独立記念日である七月四日に生まれたことを誇りに思っていました。」

そして、最初のベトナム派遣から帰国したとき、若者たちが徴兵カードを焼き、デモ行進

をするのを見て、私は憤り、彼らに「売国奴」という言葉をあびせたものでした。

再びベトナムに派遣された一九六七年十月、解放地区付近の戦闘で、私は人影を見つけ、銃弾をあびせて、殺しました。死体を引きずり出したとき、何とそれは仲間の一人だったのです。私は茫然となつて立ちすくみました。またある夜、ゲリラを待伏せしていたとき、私の部隊は誤つて罪のない一般のベトナム人たちに射撃を加えてしまいました。死体の中には、子供も二人含まれていました。部隊の仲間たちは、衝撃のあまり、ライフルをたたきつけ、水田に坐りこんで、泣いたものでした。……」

ロン・コビックは、その後右足を撃ち抜かれて、本国に送還され、傷だらけの青春の中でしだいに反戦思想に傾いて行つた自らの遍歴を語り、最後に次のように結んだ。

「そして今夜、私は誇りをもってフリッツ・エフューを合衆国副大統領候補に推薦するものであります。

マ リ コ
ウエルカム・ホーム、フリッツ！」

フリッツは徴兵を逃れるために、六年間ロンドンで働いていたが、この日帰国したばかりだった。そのフリッツを、ロン・コビックは「ウエルカム・ホーム」と叫んで、歓迎したのだった。演説が終ると同時に、フリッツは壇上に駆け上り、車椅子のロン・コビックと抱き合った。

会場から拍手がわき起こり、「アムネステイ」の横断幕を掲げた若者たちが、代議員席の間をゆつくりと移動した。南部の右派から若い反戦グループまでを幅広く包含する民主党な

らではの光景だった。

そのとき、最前列のマリコは、さっと立ち上ると、若者たちを支持する言葉を走り書きした掲示用紙を、両手に掲げて、会場の四方に示し、声援を送った。

マリコは、政治的にはモンデールに投票することを決めていたが、アムネスティの若者たちに対しても、全面的に拍手を送るのを惜しまなかった。マリコはいまや夫のメイン以上にリベラルな活動家になっていた。

パール・ハーバーの日に、ワシントンで恐怖におののいた少女が、アメリカ市民権を得て、民主党の有力な活動家になるまでに、いかなる遍歴があつたのだろうか。

マリコが日本の友人に送った手紙の中に、次のような一節がある。

「夫と私は、長年アメリカの政治運動に参加してきましたが、その大部分は苦しい闘いの連続でした。……」

マリコの波瀾に満ちた半生をたどると、激動する現代史のうねりに、いつも真正面からぶつかってきた一人の女性の像が、浮び上ってくる。そのマリコの人生は、父と母の時代と一体となって形成されている。マリコについて記すには、両親の時代まで遡^{さかのほ}らなければならぬ。――